

オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー語話者調査記録旅行誌

大島 一

(おおしま・はじめ)

hazsime@gmail.com

金沢大学国際文化資源学研究センター 客員研究員

0. 概況および調査目的

報告者の調査テーマは、オーストリア共和国ブルゲンラント州¹に居住するハンガリー語話者の言語・社会的研究である。

歴史的事実から説明すると、現在のブルゲンラント州は第一次大戦のオーストリア・ハンガリー二重君主国の敗北の結果、トリアノン講和条約により、旧ハンガリー王国からオーストリア共和国に割譲された。その結果、この地に住んでいた（旧ハンガリー王国の）ハンガリー人達はマイノリティとしてオーストリア側に取り残されることになったわけである。彼らはオーストリアの国家語であるドイツ語と自身の母語であるハンガリー語の二重言語生活を送っている。

当該地において、ブルゲンラントに居住するハンガリー系住民のハンガリー語の言語・文化資料が最も充実している研究機関が、オーストリア共和国ブルゲンラント州オーバーヴァルト郡²ウンターヴァ

ルト村³の「ハンガリー・メディア情報センター (Ungarisches Medien- und Informationszentrum, 以下, UMIZ と呼ぶ)」⁴である。

報告者は、調査期間である2012年2月27日(月)から3月17日(土)までの間の当該2週間ほどをこちらに滞在し、当センターのケレメン・ラーロー (Kelemen László)氏⁵の助力を得て、センター所在の文献・データの収集を行った⁶。

ここでの調査の主な目的は二つある。一つは当地のハンガリー語話者のハンガリー語の特徴を知るために、文献資料を集めることである。第二は当地のハンガリー系マイノリティの言語および文化を知るために、UMIZの活動をレポートすることである。すなわち、この活動記録が当地のハンガリー語話者の実態を知るためのみならず、マイノリティ文化の維持方法はここだけにとどまらず、有益であると考えられるからである。

以下でみるウンターヴァルトは「村」である。

³ 「ウンターヴァルト」Unterwart はハンガリー語名 Alsóór の意味翻訳。alsó「下」+ ór「見附」。2009年のオーストリアの国勢調査では人口913人。そのうち、74%がハンガリー語話者と申告している。これは自治体で見るとオーストリア内で最もハンガリー系住民の比率が高い。

⁴ <http://www.umiz.at/> 現在、新HPを構築中、現在はドイツ語のみ (<http://www.umiznet.com/de/>)。Facebookは、<http://www.facebook.com/umizinfo/>

ちなみに、ハンガリー語では、A Magyar Média és Információs Központ という。

⁵ ハンガリー語は「姓・名」の順で綴るので、この報告書でも、ハンガリー人名はそれに従うことにする。

⁶ 正確には2月28日(火)にウンターヴァルトの隣市であるオーバーヴァルトの滞在ホテルに到着、翌日より調査研究を開始、3月12日(月)まで滞在した。その後は、ウィーンを経て、ハンガリーの首都ブダペストに向かい、現在のハンガリー語研究動向を知るために、文献収集を行った。

¹ Burgenland は、オーストリア共和国の州の一つ。ハンガリーと国境を接する最東部にある細長い州で、1921年、第一次世界大戦後のトリアノン条約(対ハンガリー)とサンジェルマン条約(対オーストリア)の結果、生まれた州(Land)。州都はアイゼンシュタット(Eisenstadt/Kismarton)。2001年の国勢調査時点で人口約27万人のうち、ハンガリー系住民は6,641名(約2.4%)。

² オーバーヴァルト郡 (Bezirk Oberwart)の中心はOberwart「オーバーヴァルト市」である。ハンガリー語名 Felsőór という。Oberwart という名前はハンガリー語名からの借用翻訳 (felső「上」+ ór「見附」)であり、すなわち、ここがハンガリーからみて対オーストリアの前線地帯であったことが伺えるように、第一次大戦以前、現在のブルゲンラント州は、旧ハンガリー王国領であった。2001年の国勢調査では、オーバーヴァルトの人口約7千人のうち、約1千人がハンガリー系であると申告した。

なお、オーストリアの自治体は、Stadt「市」、Marktgemeinde「市場町」、Gemeinde「村」がある。オーバーヴァルトは「市」、



【写真：UMIZ 建物】

1. ブルゲンラント州の状況および歴史的背景

この土地の現状および歴史的背景を知るにあたり、今回の調査地までの道のりを説明することが興味深いと思われる。報告者はこれまで2度にわたり、この地にフィールド調査に来ているが、その道のりはオーストリアの首都であるウィーン(Wien)から鉄道でグラーツ(Graz, シュタイアーマルク州都)行きに乗り、フリードベルク(Friedberg)で下車、オーバーヴァルト(Oberwart)行きに乗り換え、オーバーヴァルトに到着するというものである⁷。

グラーツ路線から乗り換えることになる、フリードベルクからオーバーヴァルトまでの路線は、第一次大戦以前はハンガリーのソンバトヘイ(Szombathely)から途中にある現ブルゲンラント州西端のピンカフェー(Pinkafő, 現ピンカフェルト)⁸まで至る路線(の一部)であった。

すなわち、この路線は第一次大戦敗北まで当時のハンガリー王国領の西端を走る鉄道であったということになる。

しかし、第一次大戦後、ブルゲンラント州がオー

ストリア領となったことにより、このソンバトヘイ(ハンガリー)ーピンカフェルト(オーストリア)路線上を分断する国境が生まれてしまった。

その後もこの路線を引き裂くような出来事が続く。1925年にオーストリア側ではピンカフェルトから西に路線を伸ばし、首都ウィーンからのグラーツ路線内にあるフリードベルクにまで延長した。ブルゲンラントがオーストリア領になった以上、首都ウィーンからのアクセスは急務であったことだろう。一方、ハンガリー側は、冷戦体制が深まるにつれ、1956年のハンガリー動乱後の1959年に当該路線を廃止した。

オーストリア側でもハンガリーとの国境から徐々に路線の縮小が進んでいった。そうして最後に残った路線がオーバーヴァルトまでの区間であった。それが2011年8月1日をもってオーストリア連邦鉄道はこの路線の旅客運用を廃止した(貨物は引き続き運用される)。理由は利用者減少の為。いずれにせよ、ウィーンから鉄道でこの地に行くことは不可能となったのである。現在、ウィーンから一日に数便の高速バスが運行されている。

一方、ハンガリー側のソンバトヘイからオーバーヴァルトに至る路線が数年後に復活するとニュースもある⁹。それが実現されれば、今度はハンガリー側から鉄道でこの地に来ることが、いつか出来るようになるかもしれない¹⁰。

⁷ UMIZのあるウンターヴァルトには鉄道は通っていないため、オーバーヴァルトからバスもしくは車(または自転車)でアクセスする他ない。また、宿泊施設がウンターヴァルトにはないため、オーバーヴァルトにあるホテルかペンションに泊まることになる。報告者はケレメン・ラースロー氏に毎日車で送り向かいしてもらった。

⁸ Pinkafeld(ハンガリー語名、Pinkafő)。同オーバーヴァルト郡に属し、「市」である。人口約5千人のうち、2009年の国勢調査では100程度がハンガリー人と申告した。

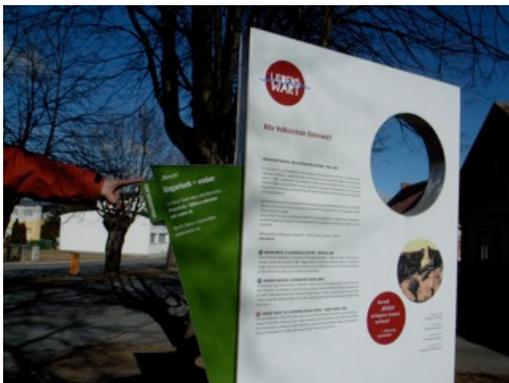
⁹ 「vasnepe.hu」(ソンバトヘイが県庁であるヴァシュ県(Vas megye)のニュースポータルサイト)に2009年11月掲載のニュースより。「4年後にソンバトヘイーオーバーヴァルト路線が復活か」
http://vasnepe.hu/cimlapon/20091111_negy_ev_mulva_ujra_jarnak_vonatok_szombat

¹⁰ しかし、UMIZのケレメン・ラースロー氏に聞いたところによると、この話は昔からよく出る話であって、「残念ながら実現には至らない。現にいま2012年現在でもなんの動きもない」とのことであった。



【写真：オーバーヴァルト旧駅舎】

ちなみに、報告者の調査対象地であるブルゲンラント州、なかでも南ブルゲンラント（ピンカ川沿い）の地域については、サイト「Lebenswart」を参照のこと。こちらはいわば当地域の名所を巡るサイクリングスポットサイトをまとめたHPだが¹¹、ドイツ語、ハンガリー語、クロアチア語、ロマ語の4言語で名所スポットに看板が立てられて当地の説明がある。



【写真：Lebenswart の名所の一つ。UMIZ の建物である古い村立学校の説明板。ハンガリー語の説明を引き出したところ】

2. UMIZ について

UMIZ、すなわち、「ハンガリー・メディア情報センター」は、ブルゲンラント州ウンターヴァルトに設置のハンガリー文化やハンガリー語資料を保存する研究所である。前身は1973年に作られたウンターヴァルト・ハンガリー語図書館。その後、欧州

¹¹ <http://www.lebenswart.at/>
ブルゲンラント州、オーストリア共和国、EUによるサポートで構築。

地域開発基金 (European Regional Development Fund, ERDF)とブルゲンラント州の援助を受けて、ウンターヴァルト村役場の隣にある古い学校を利用し、2001年6月8日に開設した。2万5千冊の書籍、30の雑誌、300のCDなどを所蔵する。一階は会議・ミーティング用の部屋、二階が所蔵図書館（およびPC設置）となっている。



【写真：UMIZ内二階部分】

なお、この設立にあたっては、UMIZ隣にあるウンターヴァルトのカトリック・ベネディクト派教会の牧師ガランボシュ・フェレンツ (Galambos Ferenc, 1920-2007)が尽力した。



【写真：UMIZ前のガランボシュ牧師の彫像】

実際のイベント活動に対しては、外部協力者との連携のもと、主なものとして、以下の下位組織が存在する。

2.1. 言語学部門

「イムレ・シャム言語研究所 (Imre Samu Nyelvi Intézet (ISNYI))」¹²が言語部門の下位組織として存

¹² <http://www.umiz.at/isnyi/index.html>

在している。こちらは本国ハンガリーのハンガリー科学アカデミー言語学研究所 (A Magyar Tudományos Akadémia nyelvészeti Intézete)とも連携を図り、国境外、特にブルゲンラント、クロアチア、スロヴェニアに住むハンガリー人のハンガリー語研究のネットワークの一つとして、社会言語学、バイリンガリズム、言語接触といったテーマのもと、研究を進めている。

2.2. 文学部門

ラディチュ・イエネーネー (Radics Jenőné)¹³の主導のもと、毎年、イベント「文学の夜」を開催している。

2.3. 幼児保育教育部門

ドワシュ・カタリン (Dowas Katalin)¹⁴主導のもと、「UMIZ for KIDS」と命名された子どもたちによる3言語（ハンガリー・ドイツ・クロアチア）での歌付き絵本シリーズを発表している。絵本はブルゲンラントの幼稚園・保育園で使用されている。

2.4. 郷土史部門

ポーシュ・フェレンツ (Pósch Ferenc)の指導のもと、オーバーヴァルト、ウンターヴァルト、シゲト・イン・デア・ヴァルト¹⁵における郷土史の資料収集を行なっている。書籍、出版物のみならず、現地の古い写真や絵葉書、手書きのものなども郷土史の対象として集めている。コレクションには2,500枚もの古い写真があり、これらはウンターヴァルト郷土史博物館が保管する。

2.5. 美術部門

オットー・オストヴィチュ (Otto Osztvits)のもと、美術関係の展覧会を行なっている。毎年5から6つの展覧会が企画・実施されている。

¹³ グラーツ音楽大学教授。

¹⁴ オーバーヴァルトの市立保育園の保母。

¹⁵ Siget in der Wart, ハンガリー語名は Órisziget という。オーバーヴァルト郡ローテントウルム・アン・デア・ピンカ (Roteturm an der Pinka, ハンガリー語名は Vasvörösvár)市場町の一部を成す村落。人口は数百人で、その殆どがハンガリー系。オーバーヴァルトから南東に6キロのところに位置。

2.6. 団体交渉部門

UMIZ が他団体と共催のイベントについての交渉などを執り行う。UMIZ のホームページ管理も含まれる。



【写真：“UMIZ for KIDS”で作成された絵本。ハンガリー語、ドイツ語、クロアチア語で書かれている】

3. UMIZ の活動（年次報告書より）

以下、UMIZ で閲覧した2011年度の「年次報告書 (Jahresbericht)」からUMIZの主な活動を示す（なお、年次によって活動の内容は異なる）。

3.1 イベント

a) 文学… 「文学の夜」開催

- ・3月15日：1848年3月15日の革命記念日
- ・10月23日：1956年ハンガリー動乱記念日

b) 芸術…画家や彫刻家の展覧会

- ・ヴェーヌス・エルヴィン (Vénusz Erwin, 彫刻家)
- ・ヨージュヴァイネー・キシシュレーリッツ・エディト (Józsvainé Kislőrincz Edit, 画家)
- ・他、26人のハンガリー系芸術家による展覧会

c) 考古学…UMIZ内に展示

d) 郷土史…古写真の展示

- ・「ウンターヴァルトとキルヒシュラーク、ナーライ」とある地域文化発展の多様性の一例、20世紀前半の村落生活の類似と相違¹⁶

¹⁶ キルヒシュラーク (Kirchschlag in der Buckligen Welt) はニーダーエスターライヒ州ヴィーナー・ノイシュタット郡にある

e) 幼児保育教育…“UMIZ for KIDS”の継続

- ・最新の4冊¹⁷を出版・紹介イベント開催
- ・コマールノ(スロヴァキア)¹⁸での紹介イベント
- ・ソンバトヘイ(ハンガリー)での紹介イベント
- ・他、各所で紹介・展示

f) 言語学…イムレ・シャム言語研究所

- ・「ブルゲンラント・ハンガリー語話者の言語使用の最新の調査結果から」：ハンガリー科学の日に開催
- ・「カルパチア盆地のハンガリー語と文化(Magyar nyelv és kultúra a Kárpátmedencében)」会議開催
- ・ウンターヴァルト, オーバーヴァルト, シゲト・イン・デア・ヴァルト, オーバープッレンドルフにおける方言調査の完了(カーロイ・ガーシュパール大学(ブダペスト)との共同調査)
- ・ハンガリー科学アカデミー言語学研究所の「国境外ハンガリー語方言リスト」の拡充



【写真：“UMIZ for KIDS”で作られた子供たちによる3言語での絵本発表会案内(2012年3月16日開催)¹⁹】

市。ナーライはハンガリーのヴァシュ県(Vas megye)の県庁ソンバトヘイから南西に7kmに位置する国境に近い村。

展覧会(„Alsóór, Kirchsschlag és Nárai – egy egységes kultúrrégió fejlődése sokszínűségének példái, a XX. század első fele vidéki életének közös mutatói és különbségei”)はキルヒシュラクのバンノン文化発展センターとナーライ村との共同で開催された。

¹⁷ „Nyuszi-Gyuszi”, „Lili, a lepke”, „Zsiga, a csiga”, „Nyári békabál”の4冊 („Zsiga, a csiga”は「2. UMIZ について」末に掲載した写真のもの)。

¹⁸ Komárno (ハンガリー語名, Komárom) はスロヴァキアのドナウ川沿いの町。第一次世界大戦以前までハンガリー領。人口の6割をハンガリー系住民が占める。現在でも町はハンガリー語標示の看板が見えたり、ハンガリー語が通じる。

¹⁹ “UMIZ for KIDS”シリーズの2012年に出版する5冊の記念紹介イベント告知である。

3.2. 出版物

- ・『カルパチア盆地のハンガリー語と文化(Magyar nyelv és kultúra a Kárpátmedencében)』(同名の多言語研究会議の発表論文集)【6】
- ・“UMIZ for KIDS”による3言語絵本の „Nyuszi-Gyuszi”, „Lili, a lepke”, „Zsiga, a csiga”, „Nyári békabál”

3.3. 研究学位論文のコンサルト

- ・Németh Barbara: „A Burgenlandi magyar nyelvjárás” (ブルゲンラント・ハンガリー語方言)
- ・Domobi Dalma Martina: „Ausztia az Európai Unióban” (欧州連合におけるオーストリア)
- ・Polgár Mónika: „A Burgenlandi magyarok oktatásügye” (ブルゲンラント・ハンガリー語話者の教育問題)
- ・Reményi Glória: „Burgenlandi magyar nyelvű népcsoport és a németnyelvűek Nyugat-Magyarországon” (Diplomamunka olasz nyelven) (西部ハンガリーにおけるブルゲンラント・ハンガリー語話者とドイツ語話者, 学位論文(伊語))

3.4. 会議・ミーティングの参加

- ・ブルゲンラント図書協会春・秋会議
- ・ハンガリー語・文化国際協会母語会議
- ・「生きている言語研究会議」, ハンガリー科学アカデミー言語学研究所主催
- ・「外国におけるハンガリー学」, ハンガリー科学アカデミー主催
- ・「情報空間(Infotér)」, ハンガリー国会下院
- ・ユネスコ「無形文化財」のハンガリー・ユネスコ協会会議

3.5. プロジェクト関係の活動

- ・UMIZのホームページ・ロゴデザインやイベント使用の為にプラカード作成
- ・ガール・カーロイ教授(Gaal Károly)の遺品の未出版物のデジタル化

3.6. 共催・後援

- ・第43回ブルゲンラント羊飼い劇（オーバーヴァルト・カトリック教会のアドベント・イベント）
- ・ペーチ大学による国境外ハンガリー人資料の大規模デジタル化²⁰
- ・ブルゲンラント・ハンガリー文化協会（オーバーヴァルト）主催の「ブルゲンラント州成立90周年」記念行事

3.7. 個人・グループのイベント・レセプション

- ・ザラエゲルセグ市（ハンガリー）代表団（自治体レベルでの文化活動共催の為）
- ・ヴァシュ県（ハンガリー）博物館協会
- ・サヴァリア博物館友好協会訪問
- ・カーロイ・ガーシュパール・カルヴァン派大学（ブダペスト）言語学専攻学生の訪問
- ・コシュート・ラヨシュ高校（ツェグレード）の生徒訪問

3.8. ライブラリ関連

- ・国立セーチェーニ図書館（ブダペスト）内の図書館提携プログラムに参加（蔵書補充等）
- ・国内外図書館との図書借り出しのやりとり
- ・専門書の取得（コレクションや古本屋から）
- ・UMIZ開催の古本市

3.9. 電子データ処理

- ・ネットワークのメンテナンスと開発
- ・ウェブホスティング・サービス
- ・ホームページ作成

4. UMIZの管理運営について

上記UMIZの活動維持にあたっては、その多くを補助金に頼っている。メインはオーストリア連邦首相府（Bundeskanzleramt, BKA）とオーストリア教育と文化、芸術省（Bundesministerium für Unterricht, Kunst und Kultur, BKK）の二つ。オー

ストリア連邦首相府からはプロジェクト資金として約32,000ユーロを受け、オーストリア教育と文化、芸術省からは給与対象の助成金で約13,000ユーロが支払われている。

また、本国ハンガリーからは、ハンガリー科学アカデミーから3,000ユーロ、ベトレン・ガーボル基金から3,000ユーロの助成金を獲得している。

自治体であるウンターヴァルトからは約2,000ユーロが出ており、その他、いくつかの助成金をあわせると、昨年2011年度の収入は約75,000ユーロ（約800万円）とのことである。

支出は人件費として約34,000ユーロ²¹、その他はイベント関連で約15,000ユーロ、ホームページやサーバー管理で約15,000ユーロであり、残りはその他諸々で収入同様の額となり、収支は拮抗状態であり、決して楽な運営ではないようだ。

5. ハンガリー語話者およびブルゲンラント方言

ここではブルゲンラント州のハンガリー語話者の置かれた状況および彼らの話すハンガリー語、すなわち、ブルゲンラント方言の特徴について記す。

ブルゲンラント州のハンガリー語話者のハンガリー語は、ハンガリーの方言学によれば、西ハンガリー方言に含まれる。いまや、国境外のハンガリー人となってしまったブルゲンラント州のハンガリー語は、いいかえれば、最西端に位置するハンガリー語の方言である。

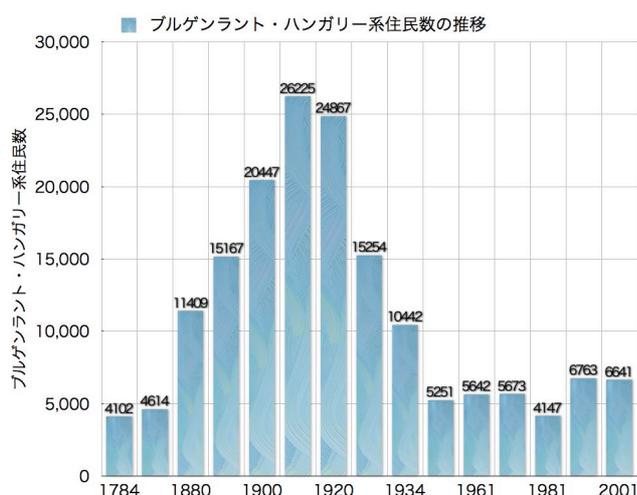
5.1. ハンガリー語話者の状況

記録に残っているブルゲンラントにおけるハンガリー系住民の数の推移は以下のとおりである。

²¹ 常勤スタッフはケレメン・ラースロー氏一人のみ。その他、各イベントに即したアルバイトや、PC、サーバー管理に非常勤で人を雇っている。

ちなみに、ケレメン氏は1973年オーバーヴァルト生まれ。父はブルゲンラント・ハンガリー人。母はハンガリーの首都ブダペストのペシュト出身。高校までブルゲンラント、大学はハンガリーのブダペストにある経済大学を卒業。その後、幾つかの企業で働き、現在、ウンターヴァルトに住み、UMIZの活動運営の責任者。

²⁰ http://www.sulinet.hu/oroksegtar/data/kulhoni_magyarsag.php の「Ausztria」を参照。



【表：ブルゲンラント・ハンガリー系住民の推移】²²

このとおり、1910年が最高の26,225人、1920年では24,867人と下降が始まる。これは第一次世界大戦敗北でブルゲンラントの土地がハンガリー王国からオーストリア領に移った1919年と軌を一にする。

現在でもこの傾向は変わらず、報告者が2009年にインタビューおよびアンケート調査した結果でも、若い世代においては家庭内外を問わず、ハンガリー語ではなくドイツ語を使用するという結果が見られた【12】。UMIZのケレメン・ラースロー研究員も「この地のハンガリー語は伝統的な方言という意味では危険な状態にある」と述べているように、戦前からこの地に住み続けているハンガリー系住民の中ではハンガリー語は絶滅状態にある。絶滅から救うためにはハンガリー語話者の家庭内でどのくらいハンガリー語が話されるかであろう。まさにUMIZの活動がそれを担っているのである（幼児保育教育の“UMIZ for KIDS”による3言語での絵本出版など）。

5.2. ブルゲンランド方言の一般的特徴

音声面：

- ・狭い *ë* と広い *e* を区別する（例、embër「ヒト」、feketë「黒い」）²³
 - ・標準ハンガリー語の *ty / gy* を、*cs / dzs* で実現する（例、bácsám (←bátyám「私の兄」)、kucsa (←kutya「犬」)、dzserék (←gyerek「子供」)
 - ・標準ハンガリー語で第一音節の *é* が *í* となる（例、szíp (←szép「美しい」)、nídzs (←négy「4」)、kík (←kék「青い」)
 - ・*l* 音が消失する（例、asztua (←asztal「机」)、rëggië (←reggel「朝」)、vuot (←volt「だった(過去)」)、füöd (←föld「土地」)
 - ・標準ハンガリー語の *ly* を、*l* (もしくは *j*) で実現する（例、mëlik (←melyik「どちら」)、petrëzselëm (←petrezselyem「パセリ」)、! ijjen (←ilyen「このような」)、ojjan (←olyan「あのような」)
- 語彙面（うしるの括弧内が標準ハンガリー語）：
- borsuo「豆」(←borsó「エンドウ豆」)、bogár「ハエ」(←bogár「虫」)、keriëk「自転車」(←kerék「車輪」)、kuobász「血のソーセージ(hurka)」(←kolbász「フランクフルトソーセージ」)

5.3. 方言レベルを逸脱する特徴：複数所有表現

本来、ある言語の標準語と方言間の関係は、音声や語彙的差異にとどまり、文法レベルで異なることは稀である。しかし、このブルゲンラント方言の複数所有表現は、標準ハンガリー語の同一のものとは比べて大きな違いを見せる。

その一例が複数所有表現である。以下の表で見るとおり、ブルゲンラント方言の複数所有は、(3人称単数を除き)標準ハンガリー語の「単数所有」の形に *-iëk* が付いていることが分かる(上での音声面での特徴から、標準ハンガリー語で *gy* が *dzs* に変

²² 「UMIZ - über Uns - Ungarn im Burgenland - Demografie」
<http://www.umiznet.com/de/index.php/ueberuns/ungarn-im-burgenland/demografie>

²³ なお、ブルゲンラント方言の冠詞は、不定冠詞が *ë / ëdzs* で、定冠詞が *e / ez* となる(後者は後続の名詞が母音で始まるもの場合に使用)。例、ëdzs asszom mëg ë liány「一人の夫人と一人の少女」。なお、標準ハンガリー語では、不定冠詞 *egy* で、定冠詞が *a / az* である。

化していることに注意)。

	標準ハンガリー語		ブルゲンラント方言
	単数所有	複数所有	複数所有
1.sn	gyerekem	gyerekeim	dzserékëmiék
2.sn	gyereked	gyerekeid	dzserékëdiék
3.sn	gyereke	gyerekei	dzserékeji
1.pl	gyerekünk	gyerekeink	dzserékünk ⁱ ék
2.pl	gyereketek	gyerekeitek	dzserékëték ⁱ ék
3.pl	gyerekük	gyerekeik	dzserékcsëkiék

【表：複数所有表現の対比】

ブルゲンラント方言の複数所有の作り方は、すなわち、単数所有の形式を複数にする（ハンガリー語の複数形のマーカーは -k である）という分析的解決法である。これは、標準ハンガリー語の複数所有のマーカー (-i) を別に立てる方策とは大きく異なる。すなわち、（ハンガリー西部）方言の枠を超えているとも言えよう。周囲のドイツ語からの言語接触の影響も考えられる。いずれにせよ、ブルゲンラント方言が単なるハンガリー語の一方言という存在以上の特徴を有する証拠と考えられる。

6. 滞在中のイベント

6.1. アイゼンベルクのワインの丘

3月5日（月）、UMIZ 代表である Horváth Günther の好意で、ハンガリー国境にある村アイゼンベルク(Eisenberg)²⁴に行く。ブルゲンラント州はワインの産地としても有名であるが、北ブルゲンラント（ノイジードラー湖近辺）では白ワインが主流であるに対して、ここ南部ブルゲンラントでは赤ワインが有名である。アイゼンベルクは村全体が葡萄畑の丘陵地であり、数多くのワインセラーが点在、

そこで上質のワインが楽しめる（ホイリゲなのでハム、ソーセージといったオーストリア風の様々な肉料理も供される）。

ハンガリーとの国境沿いにあるので、ドイツ語の標示に気づかないと、いつの間にかハンガリー領にしているということもある²⁵。ハンガリーはワインで有名であるわけで、その文化は歴史的国境とは関わらず、こうして連綿と続いていることを伺わせる。



【写真：アイゼンベルクの葡萄畑。すぐ向こうはハンガリー】

6.2. 地域発展自由大学「カルパチア盆地地域を紹介する－ブルゲンラント」：西ハンガリー大学経済学部²⁶（ショプロン、ハンガリー）

3月7日（水）、15時からハンガリー西部の国境の街、ショプロンにある西ハンガリー大学経済学部で「カルパチア盆地地域を紹介する－ブルゲンラント」と題された地域発展自由大学の連続講座²⁷の開催にあたり、UMIZ のケレメン・ラースロー研究員がブルゲンラントの歴史および言語・文化の多様性に注目した発表を行った。展示としてブルゲンラントの写真や観光関係の情報、また当地の食べ物やワインなども振舞われた。

17 時からは自由大学の講座としてグラーツ大学で歴史学の教鞭をとるゲルハルト・バウムガルトナ

²⁴ ハンガリー語名は Csejke という村落。正式な自治体名は、Deutsch Shützen-Eisenberg（ハンガリー語名、Németlövő-Csjske）という。1971年に近隣である Edilitz im Burgenland(Abdalóc), Eisenberg an der Pinka(Csejke), Deutsch Shützen(Németlövő), Höll(Pokolfalu), Sankt Kathrein im Burgenland(Póssaszentkatalin)が合併して生まれた村。

²⁵ 脇道に入っていくと小さな掘っ立て小屋があり、そこを抜けると、ハンガリー側の Vaskeresztes である。

²⁶ <http://www.ktk.nyme.hu/>

²⁷ 西ハンガリー大学経済学部国際地域経済学研究所主催：
http://nrgit.ktk.nyme.hu/fileadmin/dokumentumok/ktk/Intezetek_tanszekek/NRGIT/Szabadegetem_2012_I/TFSZE_programfuzet_2012_I.pdf

ー(Gerhard Baumgartner)による「ブルゲンラントの歴史(Burgenland története)」と、オーストリア・ハンガリー人協会会長のデアーク・エルネー(Deák Ernő)による「オーストリア・ハンガリー人の現在と未来像(Az ausztriai magyarok jelene és jövőképe)」の2つの講演が行われた。



【写真：講演発表の様子】

6.3. 欧州評議会地域マイノリティ言語事務局代表団へのオーストリアにおけるハンガリー語状況説明

3月8日、欧州評議会地域マイノリティ言語に関する欧州憲章事務局の代表団及び専門家委員会のメンバーの前で、UMIZのケレメン・ラスロー氏がオーストリア国内におけるハンガリー語の状況および今後の発展を説明するための諮問がバート・ラドカースブルク²⁸にある「パヴェル・ハウス」²⁹で行われた。ケレメン氏はブルゲンラントの初等教育におけるハンガリー語教師の現状を説明し、ハンガリー語話者が多い地域であるオーバーヴァルトなどにはハンガリー語ができる教員を雇えるよ

²⁸ Bad Radkersburg はオーストリア共和国シュタイエルマルク州にあるスロヴェニアとの国境の町。Mura川を渡れば、そこはスロヴェニアのGornja Radgonaである（なお、シェンゲン条約加盟国同士であるから、当然、国境のコントロールなどはもはや存在しない。お互いの住民は自由に、そこに国境などないかのように行き来している。

²⁹ Pavel-haus / Pavlova hiša はスロヴェニア人で旧ハンガリー王国国民であったアウグスト・パヴェル(Avgust Pavel / Pável Ágoston)を記念して作られたオーストリア内のスロヴェニア文化センター。

う代表団および専門家委員会に訴えた。

6.4. ORF（オーストリア放送協会）ブルゲンラント支局³⁰のインタビュー

3月9日、ORFのブルゲンラント支局が報告者およびUMIZについてインタビューしたいということで、UMIZにスタッフ来所。UMIZのことや報告者のハンガリー語およびブルゲンラントへの関心などについての質問に答えた³¹。なお、毎週日曜の夜に一時間ほど、ORFによるハンガリー語のラジオ放送が提供されている。

6.4. 南ブルゲンラントの名所見学

現地のハンガリー人であるサボー・ナードル(Szabó Nándor)氏の好意による。ブルゲンラントで最大の城が残るシュタットシュライニンク³²や、カトリック教会が美しいマリアスドルフ³³、映画『イングリッシュ・ペイシエント』の主人公アルマシー伯爵が生まれたベルンシュタイン³⁴など、日本ではあまり知られていない土地であるが、大変魅力的な場所であることを再確認した。

6.5. 詩と歌に見る「1848年革命および自由戦争」

3月15日は本国ハンガリーでは1848年の革命および自由戦争を記念する国民の祝日である。これに際し、UMIZでは3月10日（土）の16時から文学部門のラディチュ・イエネー他10名が集まり、詩と歌の朗読会が行われた。

6.6. ブダペスト（ハンガリー）で文献収集

3月12日から16日の間、ハンガリーの首都ブダペストに滞在し、文献収集を行った。ブルゲンラン

³⁰ <http://volksgruppen.orf.at/magyarok/aktualis/>

³¹ <http://volksgruppen.orf.at/magyarok/aktualis/stories/162187/>

³² Stadtschlaining（ハンガリー語名、Városszalónak）はオーバーヴァルト郡にある市。古城内に大学がある。

³³ Mariasdorf（ハンガリー語名、Máriafalva）。そのカトリック教会はハンガリー語での案内もあり、ステンドグラスにはハンガリー王と聖マルトン（パノニア（西ハンガリー）およびブルゲンラントの聖人）が見え、ハンガリー色が濃い教会であった。

³⁴ Bernstein（ハンガリー語名、Borostyánkő）は琥珀の産地としても有名。

トのハンガリー語話者に関する専門的な文献は既に UMIZ で収集済みだが、昨今のハンガリー語学の現状を知るために、専門書を多く取り扱う書店や古本屋を巡った。

ハンガリーの言語学関係の書籍や雑誌を多く取り扱っているのはアカデミア出版 (Akdémiai kiadó)だが、ここからの本を多く取り揃えていたマギステル書店は数年前に閉店してから、そうしたものを取り扱う代替書店がないのが現状であった。すなわち、専門書や雑誌を手に入れるためには、図書館でコピーするか、古本屋での偶然の邂逅を祈る他ない。実は研究者本人にアクセスして論文ファイルをメールで送ってもらったほうが早いといえる。

とりあえず、2006年にアカデミア出版から出た『ハンガリー語』（キーフェル（編））【13】は多くの研究者によるハンガリー語総覧といったものであり、国境外ハンガリー人やブルゲンラントの言語状況にも一章が割かれており（ハンガリー科学アカデミー言語学研究所のコントラ・ミクロージュ (Kontra Miklós)執筆）、参考文献も充実している。

7. 終わりに

以上、実質2週間のフィールド調査を通して、ほぼ毎日、調査地の研究機関であるハンガリー・メデア情報センターで調査・作業を行い、各活動を紹介してくれたケレメン・ラースロー氏に感謝申し上げます。マイノリティ言語の保全活動という観点から、今回の調査で多くのものが得られたと思う。特徴ある地域方言・地域言語の研究ともあわせて、今後の研究の有効な糧としたい。

参考文献

【方言関係】

[1] Imre Samu, 1941, A felsőöri földművelés, Debrecen. (Dolgozatok a M. Kir. Ferenc József Tudományi Intézetéből 3. sz. (Szabó T. Attila (sz.))

[2] Imre Samu, 1942, Az É hangok állapota a felsőöri nép nyelvében, Kolozsvár. (Dolgozatok a M. Kir. Ferenc József Tudományi Intézetéből 6. sz. (Szabó T. Attila (sz.))

[3] Imre Samu, 1943, Német kölcsönszók a felsőöri magyarság nyelvében, Kolozsvár. (Dolgozatok a M. Kir. Ferenc József Tudományi Intézetéből 13. sz. (Szabó T. Attila (sz.))

[4] Imre Samu, 1971, A felsőöri nyelvjárás, Nyelvtudományi értekezések 72. sz., Akadémiai kiadó, Budapest.

[5] Imre Samu, 1971, A mai magyar nyelvjárások rendszere, Akadémiai kiadó, Budapest.

[6] Imre Samu, 1973, Felsőöri tájszótár, Akadémiai kiadó, Budapest.

【会議・総論】

[7] Szoták Szilvia (sz.) 2010, Őrvidéki magyarokról, Őrvidéki magyaroknak / Über warter Ungarun, für warter ungarun, Imre Samu Nyelvi Intézet kiadványai I.

[8] Szoták Szilvia (sz.) 2011, Magyar nyelv és kultúra a Kárpát-medencében, Imre Samu Nyelvi Intézet kiadványai II.

【UMIZ 運営状況】

[9] Kelemen László, 2012, Einnahmen – Ausgabenübersicht UMIZ 2011, UMIZ.

[10] Kelemen László, 2012, Az UMIZ tevékenysége, UMIZ.

[11] Kelemen László, 2012, UMIZ Jahresbericht 2011, UMIZ.

【その他】

[12] 大島 一 (forthcoming) 「オーストリア・ブルゲンラント州におけるハンガリー人マイノリティについて：ドイツ語との二言語使用状況に関する調査および考察」、『ウラリカ』 No.16, ウラル学会。

[13] Kiefer Ferenc (sz.), 2006, Magyar Nyelv, Akadémiai kiadó, Budapest.